

5月9日

主題：イスラームと西洋の衝突～和解なき衝突なのか？衝突のフロンティアとなったヨーロッパ(主にEU加盟国)において、衝突の構造を歴史と、現代の国際関係、EUの政治動向にわたって説明する

【今日の焦点】イスラーム教徒は、西洋の何を嫌うのか？

1. キリスト教社会であるがゆえに嫌悪するのではない。

イスラームからは、キリスト教、ユダヤ教の両者は、同じ唯一神の啓示を受けた「啓典の民」であり、いわば一神教の兄弟。

先行する一神教からの引用はコーランにもみられる。イエスや MARIA は肯定的に描かれる。

キリスト教の神もユダヤ教の神も、唯一神である以上、同一でないと矛盾する。したがって、イスラームからみると、先行する一神教も同じ神の啓示を受けた人間集団ということになる。

他方、先行するキリスト教からみると、600年もたって登場した新たな一神教であるイスラームは、最初から、邪教視された。より根源的問題として、ムスリムがキリスト教徒と同じ神を信仰していること自体を受け入れがたい。ここに両者の齟齬の原点がある

イスラームが諸地域を征服していく過程で、「剣か、コーランか」すなわち、あくまで戦うか、強制改宗を受け入れるかという選択を強要したという話は、近代以降、ヨーロッパで創られたイスラームへの嫌悪に基づく意図的な偏見。

イスラーム帝国は、他の一神教徒(ユダヤ教徒、キリスト教徒)には、基本的に宗教共同体の自治を容認し、異教徒から人頭税(ズィズヤ)を徴税し、国庫の収入とした。したがって、税収を減じる強制改宗には経済合理性がない。

ただし、イスラームはキリスト教が、三位一体を主張すること。イエスを「神の子」として神性を賦与したことには強く批判的。

ユダヤ教徒が、選民思想をもち、ユダヤ人に啓示が下されたという意識をもつことにも、ムスリムは強烈な批判。彼らは、啓示を受け取った後、勝手に解釈を変更して信徒集団を形成したとイスラーム側は認識。

2. 近代以降、中東・イスラーム世界の諸地域を力によって分割・支配した歴史

中東という地域呼称について考える。なぜ、Middle East, Moyen Orient なのか？
英仏などヨーロッパ列強からの呼称。Near East は、当時オスマン帝国領であったバルカン半島。領土的野心が反映された名称。

しかし、中東の人間も、アラビア語でもトルコ語でも、「中東」にあたる表現をする。おそらく、歴史性のある中東という用語を使わないと、その地域の人間が今日もなお直面するさまざまな問題群の中に生きているという歴史性が消失してしまう。

5月16日

【今日の焦点】イスラームは西洋の何を嫌うか 分割と支配 (divide and rule) の歴史 (承前)ヨーロッパ列強による中東分割。特に英国が三枚舌を使い分けたこと。英国は「右手のしていることを左手が知らない」というような主張を、三者に対して使い分けた。三つの主要な「取り決め」や「宣言」を追いながら、列強による分割のプロセスと、それが今日の中東問題に与えた影響を考察する。

1915～フセイン・マクマホン往復書簡 (英国が、オスマン帝国から離反することを条件にアラブ王国の樹立を約束)

1916 サイクス・ピコ協定 (英国とフランスとのあいだで、第一次世界大戦後の中東分割を画策。当初ロシアも加わっていたが、革命によって離脱)

1917 バルフォア宣言 (英国外相バルフォアによる、シオニスト協会宛ての短い文書。ユダヤ人がパレスチナに「民族の郷土 = national home」建設を支援すると約束)
結局、アラブ王国は、フランスとの協定により実現せず。イラクとヨルダンにハーシム家の兄弟 (ファイサルとアブドゥッラー) に与え英国が背後から支配。
ユダヤ人の入植を加速。第二次世界大戦にかけて、英国はコントロールできず、ユダヤ人国家イスラエルの誕生へ。

オスマン帝国滅亡に際して、トルコだけが列強に抵抗して独力で独立を達成。トルコ共和国の誕生

5月23日、30日【講義に関わる重大な二つの事件が発生したため内容変更】

トルコにおける最高裁判所判事襲撃事件(5月23日付け『産経新聞』国際面に寄稿したので参照のこと。ほかにBBCのHPなどにより問題の所在と事件に関わる各国の論評をフォローすること。)

オランダにおける反イスラーム活動家(同時にイスラーム社会における人権抑圧と戦う活動家)であったアヤーン・ヒルシ・アリ氏の議員辞職・国籍剥奪(このHPの西欧・中東マンスリー参照のこと。拙著『イスラーム戦争の時代』第2章-3オランダの項を参照のこと)この事件に関しては、何らかの政治的策謀の気配もあるが、オランダにおける移民・難民に対する不寛容への転換を明示する事件という解釈が、いまのところ可能である。

6月6日【学会出張のため休講】

6月13日、20日

【今日の焦点】現代西欧世界におけるイスラーム・フォビア(Islam phobia)と外国人憎悪(xenophobia)第1回

1. ヨーロッパへのムスリム移民の歴史を概説する。

1973年の第一石油危機をきっかけに、ヨーロッパにイスラーム社会が誕生したこと(家族の追加的移住のため)

ホスト社会の側も、それ以降、高失業の時代に入り、移民排斥がヨーロッパ社会の問題となっていったこと

9・11前後から、移民排斥とイスラーム・フォビアが重なりあうようになってきたこと

【今日の焦点】現代西欧世界におけるイスラーム・フォビア(Islam phobia)と外国人憎悪(xenophobia)第2回

1. イスラーム・フォビアの根源的要因

ヨーロッパが創出した諸価値の体系とイスラーム的な価値体系の不一致に対して、西欧側が優越感をもってイスラームを軽侮しがちであること。ムスリムは「世俗化」していくことによって西欧世界が確立した諸価値に対しては容認しないが、西欧側は「世俗化」=「国

家と教会の分離」の過程を、進歩ととらえているので、軽侮の念が発生しやすい。

- (ア) ヨーロッパの移民を遅れた存在。これから啓蒙すべき人間と見続けてきたこと
- (イ) スカーフ問題に言及。2003 - 04 年にかけて、フランス、ドイツ両国で、ムスリム女性のスカーフへの禁止措置、
- (ウ) 厳格なライシテの原則（世俗主義。国家と教会の分離）を憲法に明記するフランスでは、ムスリム移民が共同体を構成してフランス社会に意見具申ししたり、政治に参加することは拒否される。
- (エ) 個人としてのフランス社会への統合に際して、ライシテ（公的領域での非宗教性）は踏み絵となる。拒否するなら、学校からも追放され、社会的に強く疎外と差別を受ける
- (オ) ドイツは、フランスのように厳格な政教分離原則をもたないのに、スカーフ禁止へ動き。公的役務に従事するムスリム女性のスカーフを禁じる動き。何が危険か？
- (カ) この議論は、19 世紀以降、「ドイツのユダヤ人の身の上に何を起こしたか」を忘却したかのような、異文化への敵対的姿勢。危険な兆候。

6月27日

【今日の焦点】西欧とイスラーム世界との主要な争点の例示

- 1．一夫多妻問題・・・とるにたらない偏見だが、ヨーロッパ側の批判には合理性がない
- 2．民主主義・・・直接民主主義的行動をとるムスリム。体制にはさほどこだわらない
- 3．人権・・・イスラーム的な人権規範との相違は何か。身体刑としてのハッド刑の意味
- 4．イスラームの人間観・・・欲望を否定しない、自己責任回避のメカニズムなど現代世界において積極的意味を持ちうること

【まとめ】西欧側からの重層的な差別と軽侮が、ムスリムを追い詰めている。さらに、パレスチナ、アフガニスタン、イラクとつづく、無差別の攻撃によってムスリムは窮迫感を強めている。2006 年に入ってから、ムハンマドの風刺画をめぐる問題が発生。

7月4日

【今日の焦点】西欧とイスラーム世界の接点にあたるトルコの過去と現状

- 1．イスラーム帝国としてのオスマン帝国から国民国家としてのトルコ共和国へ
- 2．世俗主義と民族主義の意義と問題点

7月11日

【今日の焦点】トルコのEU加盟問題

- 1．歴史的経緯
- 2．2004年のブリュッセル首脳会議以降、急速に強まったトルコ排除の論理(キプロス事前承認要求、特権的同盟関係、宗教文化的違和感)
- 3．EU統合の理念は内部から崩壊に向かっているか？
- 4．トルコ国内で、EU加盟を望む勢力(親西欧・世俗主義派、穏健なイスラーム主義者、クルド民族)
- 5．トルコのEU諸国への反発は何をもたらすか？

7月18日最終回

【講義のまとめ】現代世界における危機の連鎖

イラク、トルコ、ヨーロッパというラインでの危機の連鎖を総括的に論じる。

本講義のエッセンスは、岩波書店『世界』8月号掲載の拙論にまとめているので、関心のある受講者は参照されたい。